

生成 AI 特集「海外企業の事例分析」

Palantir（米国・データ分析）

Palantir は、政府機関向けの Gotham や民間企業向けの Foundry といった大規模データ統合プラットフォームを展開してきた。近年では、生成 AI を活用した「AIP (Artificial Intelligence Platform)」を通じて、企業内の**意思決定プロセスそのものを対象とした支援**に踏み出している。Foundry で構築された業務構造 (Ontology) を活用し、AIP ではその構造に基づく判断プロセスをノーコードで設計・自動化する仕組みを提供している。これにより企業は、過去の事例や実行結果をもとに判断基準を見直し、再活用する循環的な意思決定プロセスを構築できるようになりつつある。

1. AIP による意思決定プロセスの支援

Palantir は 2023 年に「Artificial Intelligence Platform (AIP)」を発表した。AIP は、同社が提供する既存のデータ統合・分析プラットフォームである Gotham (政府機関向け) や Foundry (民間企業向け) と連携して動作し、生成 AI を活用した高度な意思決定支援やプロセス自動化を実現する AI プラットフォームである。

AIP を用いた意思決定支援の中核には、「Ontology」と呼ばれる業務データ構造がある。Ontology は、業務オブジェクト（たとえば注文、顧客、在庫、請求など）とその属性・関係を構造化したデータモデルであり、意思決定に必要な情報を意味的に整理・接続する役割を担う。Palantir では、データの自動統合・クレンジングを司る Foundry の機能「HyperAuto」を通じて、ERP (Enterprise Resources Planning) などの業務システムのデータを統合・変換し、Ontology を構築する。

AIP の主要機能の一つである AIP Logic^{#1}はこの Ontology を基盤として動作し、Ontology を活用しながら、ノーコードで意思決定プロセスを設計・自動化できる環境を提供する。顧客は、AIP Logic で以下のようなブロックを組み合わせ、意思決定プロセスを設計できる。

- Transform ブロック：文字列変換、数値計算、形式の調整等の前処理や変換・加工を行う。
- Get Object Property ブロック：Ontology から特定のプロパティを取得し、判断や処理に活用する。
- Use LLM ブロック：自然言語のプロンプトを通じて LLM を活用し、対話の流れや状況に応じて意思決定の提案を生成する。
- Apply Action ブロック：LLM の出力に基づき、Ontology 上のオブジェクトに対して状態変更や通知送信などのアクションを実行する。

これらのブロックを組み合わせることで^{#2}、Ontology 上に形式知化されたデータを活用しつつ、意思決定と実行までの一連のフローを構築できる。なお、AIP はプロンプト処理における LLM の思考過程（推論ステップ）を可視化し、プロセスの確認・改善ができるデバッグ機能を備えてお

^{#1} AIP には複数の機能群が含まれるが、本稿では主に意思決定プロセスの設計に用いられるノーコード環境「AIP Logic」を中心に解説する。

^{#2} 他にも、外部コードの実行、変数管理、条件分岐、ループ等を司るブロック及びツールが用意されている。

り、意思決定プロセスの透明性と改善を支援する。各ブロック単位での実行ログや出力確認も可能であり、プロンプトの精度向上やエラー分析に役立つ。

2. AIP を活用した意思決定プロセスの循環

AIP を活用することで、企業は判断材料の生成から活用・評価・改善に至るまでの一連の意思決定支援プロセスを、構造化かつ継続的に運用することができる。

- 生成：過去の事例データを Ontology から取得・分析し、その情報をもとに、LLM を活用してリスク評価や対応方針などの判断材料を生成する。
- 活用：生成された情報を、実際の意思決定プロセスに組み込む。
- 評価：意思決定の結果を振り返り、その内容や影響を分析・評価する。
- 改訂：評価結果に基づき、プロンプトや判断基準を更新・改善する。
- 再活用：改訂内容を次の意思決定に取り入れ、継続的な改善につなげる。

このような循環的なプロセスにより、意思決定の効率化・精度向上・リスク低減を実現し、競争力を高めていくことができる。

3. 導入・活用事例

AT&T では、通信インフラの監視・保守業務において、Palantir の Foundry および AIP を活用している。従来は異常検知がシステムごとに個別に行われ、通知後の対応判断には熟練者の経験と判断が求められていた。現在は、トラブルチケットのような非構造化データも含めて Foundry で統合された後、AIP を活用して異常の早期特定や影響範囲の推定が行われており、対応の迅速化と一貫性の向上につながっている。異常検知時にはトラブルチケットが自動生成され、優先順位が付けられたうえでオペレーターに通知される。これにより、オペレーターは迅速かつ一貫した意思決定を行えるようになり、対応の精度とスピードが大きく向上している。

タンパ総合病院（Tampa General Hospital）は、Palantir と連携して、AIP（Artificial Intelligence Platform）を基盤とするケアコーディネーション支援システムを開発・導入している。導入以前は、ベッドの割り当て、患者の行程管理、看護師配置といった業務が、主に紙や個別システムを用いた手作業で行われており、情報の分断や対応の遅れが課題となっていた。導入後は、AIP が臨床知識と現場データをもとに対応案を提示し、スタッフがそれを確認・必要に応じて修正したうえで採用するという、人間と AI の協働による意思決定プロセスが実運用されている。この取り組みにより、患者の待機時間^{#3}や入院期間が大幅に短縮され、より多くの患者に対して迅速で適切な治療を提供できるようになった。

上記いずれの事例でも、実行ログや利用者からのフィードバックをもとに、提案内容の精度や妥当性が検証され、意思決定プロセス全体のブラッシュアップが可能となっている。

^{#3} 術後回復室に滞在している患者が、病棟に移動できずに待機している時間

4. まとめ

Palantir の AIP は、企業が保持する膨大なデータをもとに、判断材料の生成・活用・評価・改善を支援する仕組みを提供する強力なツールである。これにより、企業は意思決定プロセスを継続的に改善し、業務最適化と新たな価値創出を実現できる。

第 3 節で紹介した事例が示すように、企業の基幹業務には多種多様な意思決定が存在している。たとえその一部のプロセスであっても、AIP による支援がもたらす業務改善のインパクトは大きく、部分的な導入であっても実務上の価値が高いと言える。

※掲載されている企業名・製品名・ロゴは、各社の商標または登録商標です。本記事は公開情報をもとに百一コンサルが独自に構成・解釈したものであり、企業の公式見解とは異なる場合があります。

情報源

[Palantir AIP](#) (Palantir 公式サイト (日本語))

[AIP Logic の概要](#) (Palantir 公式サイト)

[AT&T における AIP 導入事例](#) (DevCon 2 ^{#4}; 2025 年 2 月)

[タンバ総合病院における AIP 導入事例 \(1\)](#) (Palantir 公式ブログ; 2023 年 4 月)

[タンバ総合病院における AIP 導入事例 \(2\)](#) (AIPCon 4 ^{#5}; 2024 年 6 月)

^{#4} Palantir 主催の開発者向けイベント

^{#5} Palantir 主催の AIP 導入事例共有イベント